

いとよし

稼 堂 植 批

日本魂

稼

堂

師木嶋の大和心ははるの花秋の霜にそあるへかりける

野寺藤花

撞きいつる野寺の鐘にゆらかな風なき庭の藤波の花

硯友會の席にて

窓あけて打なかむれは淺緑にこそいはれね卯の花の頃

阿彌陀寺にて躑躅花を

綾にしき錦にあやの岩つゝしはなのうてなや御佛の國

高田氏の芍薬を見にゆきて

いよす垣内外うちとに匂ふ芍薬のはなに心のへたてなのよさ

客居夏日

青柳の長さ日あかす文これに旅の浮寝の言のはもなし

栗屋君のこまかりたるをいたして

不老庵主人

ことしのこ墨染にさけ白雲の立田のはなよ心ありせば

世の風雲（硯友會席題）

風さわき雲わきかへる世なりとも動ぬ石の心こそせめ

阿蘇山

朝な夕な見れどもあかぬ知らぬ火の國を鎮めの阿蘇の神山

遠山雲多

巴城

夏來れば阿曾の遠山やまなして朝な夕なに雲のたちたつ

暮春卯花

溪川學人

我宿の垣根卯の花さきにけり春はてかたになりやしぬらん

酒

酒のこて酔ひさらませは世の中のふみやきすてゝ死なましものを

寄鶯述懷

うくひすの 鳴く聲きゝて 世の中は 春とそ見ゆる ますらをの 我はたい
ろに 幾年か蓄へ來つる 村肝の これの心は はた又如何に

うくひすの鳴かさらませは唐衣春いつ來なんうくひす鳴かすは

友人と松蔭に酒酌けるをりよめる(今様)

萩露

松ふく風の音きよく 語らふ友のへたてなく かたみにかす杯に 千世の影そ
ふ契かな